令和２年度　東国文化自由研究レポート

研究テーマ

埴輪は、どこから？

～埴輪生産の謎に迫る～

提出日　令和２年８月２４日

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

１年　１組　28番

氏名　福島　詩

埴輪は、どこから？
～埴輪生産の謎に迫る～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校　１年　福島　詩

１．テーマ設定の理由

たくさんの種類がある埴輪。私はそんな埴輪がどのように作られていたのか興味をもちました。埴輪窯跡を調べていくうちに、埴輪づくりに使われた土から埴輪の分布が分かるのではないかと思い、このテーマを設定しました。

２．研究の方法

（１）埴輪窯跡に行く。
（２）歴史館に行く。
（３）写真、資料を集める。
（４）埴輪関係の本を読む。

３．研究の内容

（１）埴輪の生産

埴輪にはたくさんの種類があります。円筒埴輪や人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪のように人やモノの形を表現した形象埴輪などで、細かく分けると十数種類以上も存在しています。

埴輪は小さな古墳でも数百本、大きな古墳になると数千から数万本も必要になることから、埴輪作りに長けた専門的な人々が作っていたと考えられています。彼らは、水場に面した緩やかな斜面地に専門の工房と窯をつくり、長い間埴輪を作り続けていました。

（２）埴輪工場

埴輪は初め地面に簡単な竪穴を掘って、周囲に薪を積んで焼く縄文時代以来の野焼きで焼かれていましたが、５世紀中頃に朝鮮半島から須恵器焼成の技法が伝わると、その影響を受けて本格的な登り窯で焼かれるようになりました。この焼成方法は、従来の野焼きに比べてより高温で焼け、一定の温度に保つなどの火の管理がしやすく、しかも一度に大量に良質な埴輪を作ることができるようになりました（図１）。このことから、５世紀後半以降、登り窯による埴輪生産が各地に伝わり、埴輪生産に大きな転換をもたらしました。窯跡の遺跡は「埴輪制作遺跡」と呼ばれ、関東地方ではこれまで数十遺跡が見つかっています。

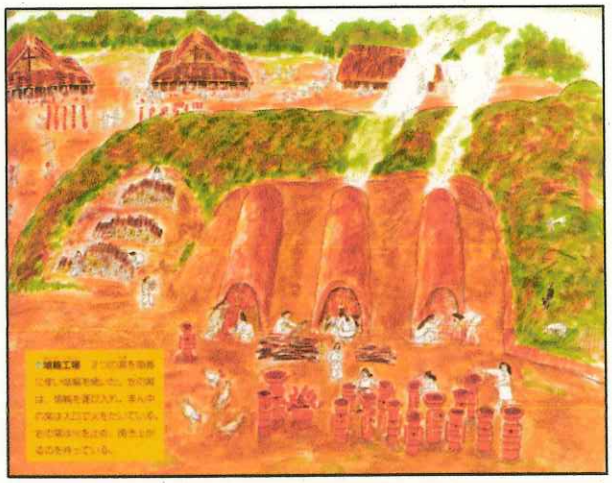

図１　登り窯の埴輪工場

（３）群馬県の埴輪製作遺跡

群馬県では埴輪製作遺跡が現在までに６か所確認されています。太田地域と藤岡地域の２地域が拠点的生産地です。藤岡市にはそのうち２カ所、神流川流域の本郷埴輪窯址と猿田埴輪窯跡があります。

① 本郷埴輪窯跡

明治 39 年（1906 年）に日本で最初に発見された埴輪窯跡として著名な遺跡です（図２・３）。東京帝国大学の柴田常恵によって発見され広く知られることになりました。昭和 18 年（1943 年）と昭和 19 年（1944 年）に群馬師範学校の尾崎喜左雄教授によって発掘調査が実施されたことを受け、国の史跡に指定されました。平成元年（1988 年）には窯の位置する斜面下の平担地が発掘調査され、灰や炭、焼き損じた埴輪などを廃棄した「灰原」が発見されました。この灰原が窯跡から数百ｍ離れた場所でも見つかり、埴輪跡がより広範囲に広がることが明らかになりました。この窯跡で製作された埴輪は、円筒埴輪だけでなく、人物、馬、家、武具など各種の形象埴輪もたくさんありました。また、平成 30 年（2018 年）には窯のすぐ西側から、埴輪棺をもつ前方後円墳が発見されました。埴輪棺は棺としてはあまり用いられないもので、埴輪製作に関わっていた人物が葬られた可能性が高いと考えられています。このように本郷埴輪窯跡をとりまく周辺の様子が徐々に明らかになってきています。約４ｍの間隔を置いて二基の埴輪窯跡が検出されました。連続した約 100ｍの同一形面には、４ｍの間隔で 20 数基の埴輪窯の存在が推定されています。

図２　本郷埴輪窯跡（石碑と覆屋）

図３　窯の全景

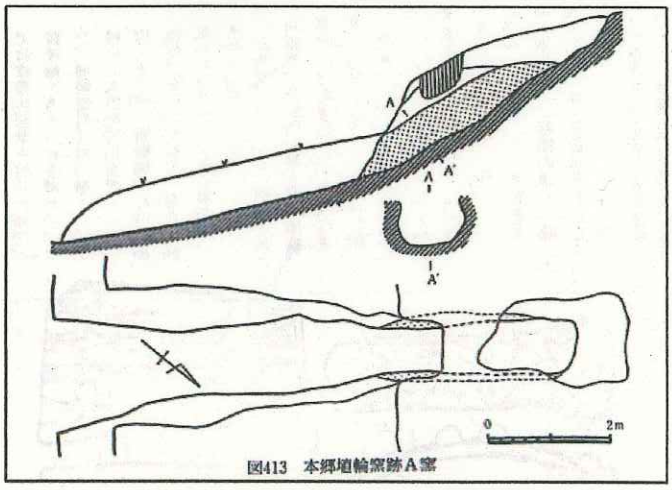

図４　本郷埴輪窯跡Ａ窯

実測図の残されているのはＡ窯です（図４）。Ａ窯は上下の２つの部分に大別できます。下部は長さ 5.5m、上位の幅 1.8ｍで、底面は船底形をした溝状を呈し、最下位は東南方向に向けてラッパ状に開口しています。底の傾斜は約 10 度です。この下部の部分は風の取り入れ口と、通風のための施設と考えられます。上部は長さ４ｍ断面の直径 1.2ｍ、短径 0.8ｍの円筒状をなします。底部は幅 0.95ｍで、傾斜は約 30 度であり、階段は存在しません。左右の壁は金属音がするまで焼けており、この部分は燃焼部です。

落下した窯体の状態からみて、天井部は別途架構したものと推定されます。

②猿田埴輪窯跡

県道金井・倉賀野線の拡幅伴って発見されたこの遺跡では、４つの窯とその灰原が発掘調査によって確認されました。窯の内部に残っていた大型の円筒埴輪は、400mほど西にある七輿山古墳のものと非常に高い類似性をもっています。またこの調査に携わった研究者のその後の分析により、５世紀後半から操業が始まり、６世紀後半まで埴輪を作り続けていたとの考えが示されました。

（４）埴輪づくりの人々

埴輪づくりでは、人や馬などの形象埴輪を歪まないように粘土を積み上げながら作ること、埴輪専用の窯を作り、そこで温度を調節しながら焼き上げることなど、程度の経験や知識が求められていました。

① 群馬の工人による埴輪づくり

群馬県に埴輪が登場するのは、近畿地方から遅れること半世紀以上たった４世紀後半のことです。玉村町下郷天神塚古墳（前方後円墳・全長 80m）の器台形埴輪、太田市朝子塚古墳（前方後円墳・全長 23m）の後円部頂に並べられた器台、壺、家、盾形埴輪がそれにあたります。どちらの古墳とも近畿地方の埴輪にはない在地的な形と、４世紀前半までの古い特徴をもっており、近畿地方やその周辺地域の情報を基に群馬の工人が作ったものと考えられます。この時期の近畿地方でも古墳ごとに形が異なり、常に埴輪を専門に作っていた人々の存在は考えられません。群馬でも古墳づくりのたびに工人を組織したのだと思います。

②大和王権からの派遣の工人による埴輪づくり

５世紀前半に造られた藤岡市白石稲荷山古墳（前方後円墳･全長 140m）では、近畿地方と形や作りがきわめて近い家形・短甲形埴輪、円筒埴輪が地域色の強い円筒埴輪と共に出土しています。こうした傾向は５世紀中葉の太田天神山古墳にも見ることができます。

太田天神山古墳の石棺は大王墓に用いられるものと同タイプで、工人の派遣など大和王権からの王権の派遣があったのでしょう。ただ、埴輪を立てる古墳が大型墳などに限られており、組織的な埴輪作りが行われたとしても、常に埴輪のみを作り続けていたわけではないと思います。

③埴輪づくりを専業とするムラの出現

こうした背景の中で、五世紀後半、登り窯（窖窯）の導入により、埴輪の大量生産が可能になりました。これにより、生産地が固定され、生産拠点として土の選定から焼き上げまで一貫して行うことにより、埴輪づくりを専業とするムラができるという社会的な意味があります。

埴輪をつくったのは「土師部」と呼ばれた職業集団（埴輪づくりを専門的に行う人々）で、その最初の統率者が野見宿祢であったといいます。藤岡市本郷には、埴輪を焼いた窯跡がいくつも発見されています。集落を営みながら埴輪の生産を行っていたことが分かります。古墳時代、彼らは、藤岡市のなかでも河川に面した斜面地を選

図４　土師神社

んで生産地を作りました。この地は「土師部」が住み、土師郷と呼ばれていたのだそうです。

藤岡市本郷の土師神社はこの土師部たちが、祖先を祭った神社です（図４）。この土師神社を中心に、数十基の埴輪窯の存在が認められています。そのうち二基が前述した本郷窯跡と猿田窯跡です。

藤岡市の「ふるさとの伝説」という書物に、「野見宿祢」についての言い伝えが記されています（図５）。

野見宿祢［のみのすくね］

垂仁天皇の３２年の秋に、皇后日葉酢姫（ひばすひめ）がお亡くなりになった時、朝廷では当時の風習で殉死する人を陵墓（みそさぎ）の回りに生き埋めにするのは残酷で良くないことだから代わりを考えるように相談なさいました。

そこで、野見宿祢が出雲国土師部（はじべ）１００人を集めて、土をこねて人や馬、その他の形を造って献上し、生きた人に代えて陵墓に立てることを、跡の後の世までの法則にされたいと申し上げました。天皇は大変喜ばれて、それらを日葉酢姫の墓に立て、埴輪と名づけて、以後は死の風習を廃止しました。これが埴輪の始まりといわれます。

野見宿祢は功績を褒めたたえられ、「埴輪の元祖」として土師臣の姓（位）をもらい、埴輪を作る土師連の先祖となって、子孫代々天皇の御大葬の儀式をつかさどることになりました。

野見宿祢は、本郷の土師神社に祭られています。

図５　野見宿祢の話

（５）埴輪製作場の特徴

埴輪を生産するのに必要なものは、粘土・水・燃料用薪です。このうち、原料粘土については、採掘される場所が限定されます。近くに窯場を設ける場合には、適当な台地であることも条件に加わります。このことから埴輪の製作場は、いろいろな条件がそろった場所であると言えます。

猿田埴輪窯は、鮎川の東岸にある窯です。本郷埴輪窯は、神流川左岸の河岸段丘の傾斜を利用して構築されました（図６）。開折扇状地である藤岡台地の下部には、藤岡粘土層があり、この粘土は藤岡の特産である瓦の生産に今も活用されています。本窯跡の存在する地域でも、表土下に同様の粘土層があります。本窯跡がこの地に営まれた背景には、こうした段丘崖と粘土層の存在があったものと考えられます。

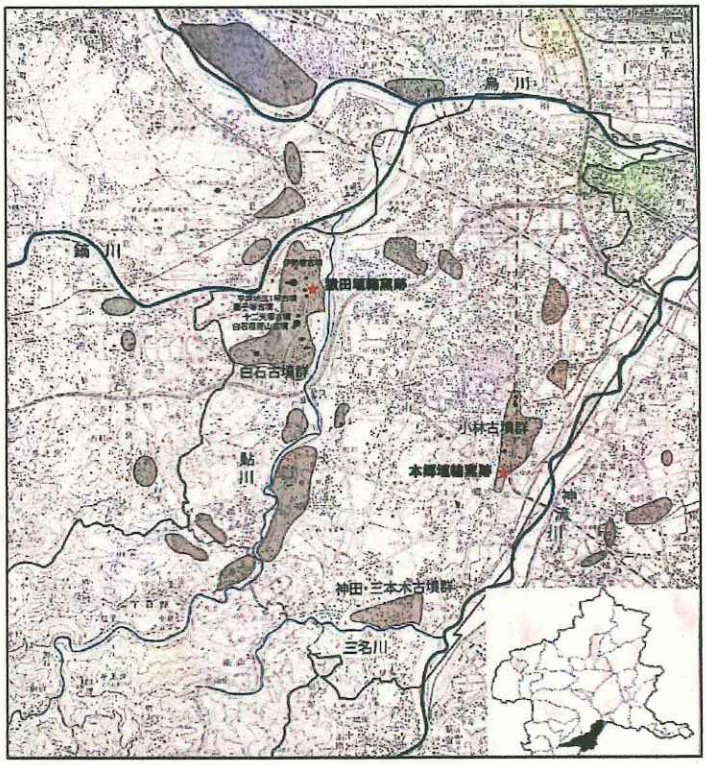

図６　藤岡市の地形図と窯跡の分布

（6）藤岡産埴輪の粘土の特徴

本郷埴輪窯跡群から出土された埴輪の破片のほとんどに、結晶片岩砂粒と海綿骨針化石が含まれていました（図7）。また、還元焔焼成ぎみの質感が見られました。埴輪を観察すると、結晶片岩はキラキラ光り、白色から黄色を帯びた２～３㎜の海綿骨針化石が混入しています。

図７　結晶片岩と海綿骨針化石の生産地

（7）藤岡産埴輪の分布

高崎市の保渡田八幡塚古墳には登り窯で焼かれた埴輪が用いられており、藤岡産の可能性が高い土を用いたものも多く確認されています。また、円筒埴輪の規格化・軽量化が行われており、拠点による大量生産の結果と見なせます。高崎市の井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳の築造がきかっけで盛んとなり、安中市の梁瀬二子塚古墳など県西部各地の古墳へと埴輪が供給されていたと推定されています。藤岡地域はもちろん、周辺への供給を見据えた埴輪づくりがおこなわれていた窯であるといえそうです。

以後、藤岡産の埴輪は地元の藤岡地域を中心に富岡・安中から前橋・赤堀の広範囲に６世紀末まで供給され続けます。この間に藤岡中心の有力前方後円墳は高崎市平塚古墳、安中市簗瀬二子塚古墳、前橋市王山古墳、藤岡市七輿山古墳、綿貫観音山古墳、甘楽町笹森稲荷古墳、高崎市八幡観音塚古墳と造られました。

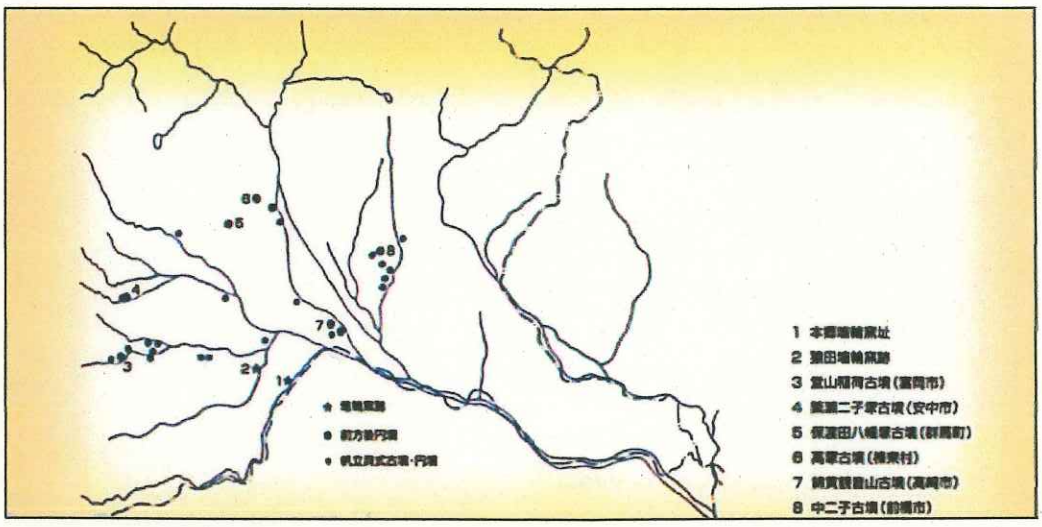

図８　藤岡産埴輪の分布図

これらの古墳は勢力的に突出したものはなく、基盤とする地域も造られた時期もいろいろです。また、埴輪の様相が分かっているものについては藤岡産の埴輪が確認されており、各時代、各地域の有力な豪族に供給していたようです。このことは特定の地域の豪族や時々の最有力者の強い影響基にあったのではなく、ある程度自由に操業していたことをうかがわせます。埴輪が商品的な扱いを受け、求めに応じて埴輪を造る、あるいはストックの中から搬出する、そんな姿を思い描きます。

６世紀前半に造られた前橋市中二子古墳の埴輪は三割ほどが藤岡産ですが、そのほとんどは形象埴輪が占めています。形象埴輪については特に見栄えを気にし、埴輪づくりに長けた藤岡の拠点へ発注したのでしょうか。

６世紀後半になると、より遠隔地へと埴輪が供給されます。綿貫観音山古墳の「三人童女」と栃木県足利市葉鹿熊野古墳の「三人童女」は形や作り方がとてもよく似ており、同じ工人集団の手による可能性が高いです。同じような例は、埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯と千葉県市原市山倉一号墳などいくつか指摘されています。関東独自の文化として埴輪が盛んな時期に、その供給において融通の利いた仕組みができあがっていた可能性があります。

４．研究の結果と考察

（１）結果

・埴輪は登り窯によって大量生産が可能となった。
・群馬県では埴輪製作遺跡が６カ所確認されている。
・埴輪は埴輪づくりを専門に行う工人によって作られていた。
・土師部の統率者は、野見宿祢である。
・埴輪の製作所は河川のそば、台地、粘土質の土壌であることなどの条件が揃った場所である。
・藤岡産埴輪は県西部各地に供給されていた。それは、埴輪の粘土の特徴から分かる。

（２）考察

群馬県に６カ所ある埴輪製作遺跡の一つ、本郷埴輪窯跡へ行きました。一部ですがしっかり窯跡が残っているのを実際に見て、驚きました。また、自分の見ているところで、昔の人が何百年も昔に埴輪を作っていたことを想像すると、不思議な気持ちになりました。今より便利な道具が少ない中で、埴輪専用の窯を経験や知識を基に作っていたのが、すごいと思いました。その窯で、埴輪を手間暇かけて大量に作っていたことに感心します。

私は今回調べるまで、群馬でこんなに埴輪が出土していることを知りませんでした。群馬で出土した埴輪で貴重なものは東京の国立博物館に展示されていることが分かりました。それも一部は、藤岡産です。私のように知らない人もたくさんいると思うので、地元で出土されたものは地元の博物館や資料館で保管したほうが良いと思いました。

保渡田古墳群と福島県でもよく似た埴輪が出ました。また、高崎市と埼玉県でもよく似た埴輪が出土しています。埴輪は壊れやすいため、遠くまで運ぶのは難しいです。藤岡が埴輪の供給場所だったとしても、この出土場所は移動できる範囲を超えています。私は埴輪職人の弟子が散らばり、同じような技術が広まっていったのだと思いました。授業で詳しく習わない工人のこともよく知ることができました。調べていくうちに、昔の人がどのように埴輪を作っていたのか、自分の知らない物語が見えてきて、面白かったです。

【引用・参考文献】

※1　一瀬和夫『古墳の研究』ポプラ社（2000）

※2　令和元年度藤岡歴史観夏季企画展『埴輪の匠、藤岡にあらわる―埴輪造りの窯をさぐる―』藤岡歴史館（2019）

※3　藤岡市「藤岡市ホームページ」
http://www.gunmaibun.org/remain/guide/seimo/hongou.html

※4　田島桂男『日本の古代遺跡 17 群馬西部』保育社（1984）

※5　前原富『東国大豪族の威勢・大室古墳群【群馬】』新泉社（2009）

※6　松島栄治　『東国文化副読本』群馬県歴史文化遺産発掘活用発信実行委員会（2013）

※7　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬の遺跡４古墳時代１【古墳】』上毛新聞社（2004）

〈注意書〉ここにのりをつけて、作品の最後のページの下に貼ってください